

第七回 「宮古島文学賞」 選考評

もりお みずき

令和に入って早や六年。世界も日本も、そして個々の私たちも、さまざまな困難や悲惨を前に、ある種の空虚感を抱き、未来への希望を失いがちになる。

「宮古島文学賞」の候補作品を読むにつけても、作者の方々が生きる意味を探し、未来への光を求めむと作品に向かっていることが伝わった。作品を紹介させていただく。

一席「水平線」。主人公の落子（ふきこ）はガン再発の不安を抱え、生きる場所として祖母の住んでいた宮古島の伊良部を選ぶ。今も色濃く神々の世界と共存する伊良部島佐良浜。落子の現実とあの世のあわいにいるような日々の暮らし。特に戦死した大伯父の記憶の泉に入り込んだ戦時中の描写の生々しさ、へびやヤモリなど小動物のかもす霊の気配など、鳥肌の立つような表現力であった。落子は水平線のかなたに想いを馳せ、自分が死に場所としてこの島を選んだことに改めて気が付く。

二席「爆ぜる。」は二十一歳の「俺」が主人公。母のガン闘病の末の死、母のため目指した医学部受験の三度の失敗、父の急死。孤独と絶望と死の恐怖に慄く俺の心情と行動を繊細に、時に美しく綴っている。俺の内部で爆けたものは何だったか。人はみな孤島、しかし橋を架けることができる。俺は橋を架けることができたようだが、末尾の、俺の父をひき殺した青年の自死の意味するものは読者にゆだねられている。

佳作「夏の消印」は、ですます調の敬体の文章で低く音楽が流れているような心地良さだった。「私」は母と自分を捨てた父に会うために、小学三年で離れた比木島を訪れる。浜辺で回想にふける私の前に男の人が現れる。互いにそうとは言わず静かに言葉と気持ちが行き来する。男の側の砂色の犬、思い出のなかの幼な友だちいくみちゃん、波の音風の音傾く松林、そしてふたりは別れる。テーマ

もストーリーも必要なく、ただある時のひとつの家族の情景である。

「白い島」は長期入院している病室の白い壁。窓辺の宮古島マンゴーの種が発芽したことをきっかけに、少年の世界は鮮やかに変化していく。「北緯三十度より南」は、題がユニーク。五十年前の大阪万博の頃のある家族の情景。五十年後に実現した宮古島への家族旅行。時の流れの早さ生きることの愛おしさ。「島の少年」は典型的本格的な児童小説。冒険と友情の物語が清しい。「島でおよぐ」はAIが日常化し、科学の力によって障害も克服できる近未来の小説。「廃島」は重苦しい作品であった。廃島の情景、三人の罪を負った人物描写が秀でていた。過失によって愛するわが子を失ったことは一生をかけても償うことはできないのか。

作品のなかの登場人物たちは必死で生きる道を探していた。どのように現実が苦難に満ちていようとも、人は生きたい！明るい未来を希望したい！この文学賞に全国から注がれるまなざしも未来へ続く光のひとつである。